

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

「CARD：ヒンドゥー儀礼研究のための基礎資料」の公開のために

永ノ尾 信悟

電子版漢籍2011年の圧倒的浸透

橋本 秀美

倉石武四郎博士講義ノートデータベースについて

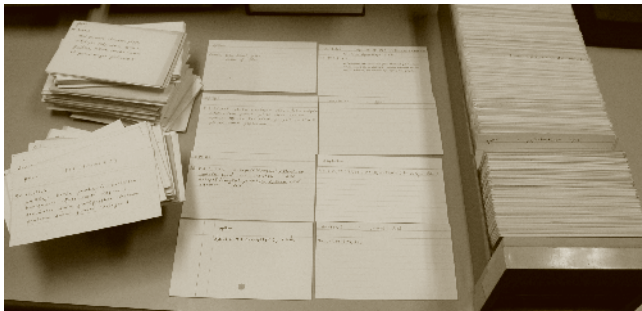
戸川 芳郎



「CARD：ヒンドゥー儀礼研究のための基礎資料」の公開のために

永ノ尾 信悟

40年ほど前にインド哲学の勉強を始めたときから、いろいろな方法で資料の整理を試みてきました。大学ノートやルーズリーフ、京大式カードや図書カードに見出し語をつけてメモを作ってきました。東洋文化研究所に勤める前に働いていた国立民族学博物館は早くからコンピュータを導入しておりました。まわりにコンピュータの専門家もあり、30年ほど前から、こんどはコンピュータのエディタを用いて資料の整理と蓄積を始めました。それ以前に最もよく利用していた図書カードの延長という意味でそのファイルの名前をCARDとしました。このCARDについては、この『明日の東洋学』の(2000年12月発行)で「ヒンドゥー儀礼研究のための基礎資料」と題して概略を報告しました。この2012年のうちに、東洋学研・情報センターの広田准教授の全面的な支援のもとで、センターのホームページを通じてこのCARDを公開することにしました。公開する場合、利用者のためにこのデータベースの説明と利用方法を示す必要があります。この報告ではそのCARDの説明と利用方法の原案のかたちでCARDの現在の状況と問題点を説明することにします。



はじめの永ノ尾カード。30年前のものから、6万枚前後。これらからもデータベース化している。

1. CARDは南アジアの儀礼を中心とした文化のさまざまなレベルの要素を見出し語として整理したデータベースである。
2. 見出し語は英語のアルファベットの順に入力されている。
3. 説明は基本的に英語である。
4. サンスクリットの表記はいわゆる Kyoto-Harvard 方式に従う。(喉音の前の鼻音はGではなくnを用いて、また口蓋音の前後の鼻音はJでなくnを用いて表記している。)
5. 典拠となるサンスクリット文献は省略形で表示している。
6. グリフヤストラへの補遺文献までのヴェーダ文献は *vedic texts* の見出し語で検索ができる。
7. 個々の文献に関する書誌情報や研究情報はそれぞれの文献の省略していない名称の見出し語のもとに入力している。
例：アタルヴァヴェーダパリシシュタは *atharvavedapariziSTa* の見出し語により検索できる。アタルヴァヴェーダパリシシュタの省略形は *AVPZ* であるが、*atharvavedapariziSTa* と *abbreviation* の重複検索で *AVPZ* であることを確認できる。他の文献の省略形も同様にして検索できる。
8. 書誌情報のうち校訂本は *edition*、翻訳は *translation*、内容は *contents* との重複検索で、研究情報は *bibl.* との重複検索で知ることができる。
9. マハーバーラタ、プラーナ文献、そして『マヌ法典』以降の法典文献も個々の文献そのものの情報は省略しないテキスト名のもとに入力している。



"zraaddha" (祖先礼拝) と "txt." で重複検索した、永ノ尾カードシステムの元のデータの様子。

10. マハーバーラタの省略形は *mbh*、プラーナ文献と法典文献は固有の名称と *puraaNa* または *smRti* のあいだにスペースをいれて典拠文献として示す：パドマプラーナそのものへの情報は *padmapuraaNa* により、典拠文献としては *padma puraaNa* により検索できる。
11. ダルマニバンダなどその他の文献、仏教文献は省略されていないかたちですべて入力している。
12. 以前のフロッピーデスクの容量の制約でデータベース CARD は *card1111* から *card422* の18個のファイルからなっている。それぞれのファイルの冒頭の文字または語は以下のものである：*card111 a*, *card112 akSaya*, *card112 b*, *card121 c*, *card122 dhaanya*, *card211 g*, *card212 homa*, *card221 kapaala*, *card2221 madya*, *card2222 mantra*, *card311 n*, *card312 pavadi*, *card321 r*, *card322 saras*, *card411 t*, *card412 upendra*, *card421 viSNu*, *card422 yuga*。
13. 見出し語の後のさまざまな情報は Tab 3 回分のスペースから始まる。見出し語が Tab 3 回分より長い場合はその語の後に Tab を一回取って説明をはじめている。
14. いくつかの語や省略形が機能的な役割をはたしている。すでに述べたように *edition*, *translation*, *contents*, *abbreviation* は典拠文献そのものへの情報を与えてくれる。典拠文献とその他の見出し語への研究情報は *bibl.* が、関連項目は *see* が教えてくれる。ある見出し語の下位の要素は *var.* によって見つけることができる。(私自身 *see* によるのか *var.* によるのか迷うことがある。)
15. ヴェーダ祭式は *zrauta ritual* と *gRhya ritual* の見出し語のもとで全体像を見ることができる。それ以外の儀礼は基本的に個々の儀礼名称により検索をする必要がある。特にプラーナ文献が記述する年中儀礼には鳥瞰的な情報をまとめることができていない。(今後 *tithivrata* の見出し語のもとで試みたい。)
16. ある儀礼の見出し語のもとに理想的には以下の項目がみられる。*see*：関連項目、*bibl.*：研究文献情報、*txt.*：典拠文献における記述箇所、*contents.*：ある文献によるある儀礼の記述の内容、*vidhi.*：ある文献のサンスクリットの記述、*note*：ある儀礼に特有な要素、たとえば儀礼の行われる時、場所、など。
17. その他の全体的な関連をもつ見出し語：*places of rituals*：普通

の祭場以外のさまざまな場所を see で列挙している。times of rituals：儀礼の行われる特殊な時間、ritual act：さまざまな要素的な儀礼行の一覧、fauna：儀礼文献などに言及される動物の一覧。flora：儀礼文献などに言及される植物の一覧。metal：金属、鉱物などの一覧。儀礼の効果、結果などの一覧は bhaya、kaama、phalazruti、siddhi の見出し語のもとで一覧的に見ることができる。18. ヴェーダ祭式の解釈文献ではさまざまな儀礼要素を、他の存在、観念などと同一視する場合が非常に多い。それらの例は::によって見出すことができる。例えば oSadhayaH (Tab):: aapaH. KS 13.4 [184,14] (kaamyapazu, prajaakaama) は「oSadhayaH 植物たちは aapaH 水たちと等値されているが、願望の犠牲獣祭の子孫を望む儀礼を記述するカタ・サンヒターの 13 章 4 節、使用した校訂本の 184 ページの 14 行においてで見ることができる」ことをしめす。それに対して aapaH (Tab):: oSadhayaH, see oSadhayaH:: aapaH (MS, KS, TS) という情報は「水たちは植物たちと等値されるが、それに関しては植物たちが主語になっている場合のところを見よ、MS、KS、TS の省略形でしめされる文献のところで記述されている」ということを示している。

19. データベース CARD にはさらに pmantr11、pmantr12、pmantr21、pmantr22 の 4 つのファイルが含まれている。ヴェーダ文献のマントラは M. Bloomfield の Vedic Concordance によって多くを検索できる。それ以外の文献のマントラを取録したのがこれら 4 つのファイルである。

20. pmantr* はサンスクリットのアルファベットの順に配列されている。pmantr11、pmantr12、pmantr21、pmantr22 はそれぞれ a、k、p、r からはじまる。

例を示す：avasRja punar agne pitRbhyaH // (TA 6.4.2.f) BaudhPS 1.11 [16, 5] (pitRmedha). AgnGS 3.6.3 [151, 13] (pitRmedha). 母音 a ではじまるマントラであるので pmantr11 に含まれている。マントラの引用は // で終わる。その直後にヴェーダのマントラの場合 () 内にヴェーダ文献を挙げる。このマントラが登場する儀礼文献の箇所と、その後の () に儀礼の種類を明示する。(現在、儀礼の種類と言及は極めて不備である。)

データベース CARD はまだまだ不完全である。単純には多くの誤字、脱字があるからである。他方このデータベースは作成者が死ぬまでに完成することはないと思われる。このデータベースが扱う南アジアの儀礼を中心とした文化要素があまりに膨大すぎるからである。さらに、作成者の関心と視点が、データベースを作成する作業を通じて変化していくので、絶えず追加、修正をしなければならない。



現在開発中、「CARD：ヒन्दウー儀礼研究のための基礎資料」で、「zraaddha」と「txt」を入力（検索）した画面。

<http://card.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

不完全であるが少なくとも作成者にとりきわめて便利なおものである。しかし作成者以外の利用者にとり便利なおものでない可能性がおいにある。上に述べたこのデータベースの説明だけでは、このデータベースのことがわかりにくいと思われる。このデータベースはホームページのインターフェースを通じて重複検索ができるが、全体がそれではわからない。CARD に含まれる card* と pmantr* はファイルとしてダウンロードすることができる。ダウンロードしたそれらのファイルを開いて眺めてみていただくと、作成者がどのようなつもりでこのデータベースを作ったかが、より明瞭にわかっていただけるかもしれない。

誤字、脱字の指摘、不足している情報の捕捉など利用者が気づかれたことを作成者にメールでお知らせ願いたい。絶えず更新していく、不備の少ない、役に立つデータベースになるように試みていく。

利用者がこのデータベースを何らかのかたちで利用して論文などを書かれ場合、この CARD を利用したことと言及してください。ありがとうございます。

(東京大学東洋文化研究所教授)

電子版漢籍 2011 年の圧倒的浸透

橋本 秀美

皆さんご存知のとおり、東文研（東京大学東洋文化研究所）では、十年ほど前から漢籍目録データベースを公開、続けて漢籍善本全文画像データベースを公開、現在に至るまで運営を維持しており、多くの研究者に多大な便益を提供してきたばかりでなく、漢籍関係情報の電子化・公開化の先駆的事業として、他の図書館・研究機関にも大きな刺激と影響を与えています。漢籍目録データベースについて言えば、その後、京都大学人文科学研究所・東文研・情報学研究所が幹事機関となり、人文科学研究所のセンターが実質運営主体となって日本全国漢籍データベースが成立しましたし、台湾では中央図書館（台湾国家図書館）が東文研漢籍目録データベースの作成経験を生かして館蔵漢籍目録データベースを作り、更にその中に台湾全体の公的機関のほか、北京図書館（中国国家図書館）などの所蔵漢籍の目録データも取り入れられ、東文研の

漢籍目録データも収録されて、一括検索できるようになっています。数年前には、北京図書館のウェブページ上で、東文研の漢籍目録データベース・漢籍善本全文画像データベースが直接利用できるようになり、中国大陸での利用も更に便利になりました。

従って、東文研の漢籍関係情報の電子化事業は、その最初期に非常に大きな成果を挙げたものとして記憶されるべきものですが、その後の電子化事業の展開は当初の我々の想像を超える規模で展開しており、十年前とは正に隔世の感があります。まず、公的図書館のウェブページで公開されているサービスから言えば、上述の北京図書館のウェブページでは、東文研の二つのデータベースの他に、北京図書館の漢籍デジタル化テスト事業として、膨大な量の地方志をカバーするデータベースが実用に供されていますし、



北京図書館ウェブページ上の東文研漢籍善本全文画像データベース
<http://res4.nlc.gov.cn/home/index.trsr?channelid=629>



北京図書館ウェブページ上の地方志データベース
<http://res4.nlc.gov.cn/home/index.trsr?channelid=8>

外部との共同企画としては、プリンストン大学図書館の漢籍目録データベースと、ハーバード燕京図書館の善本全文画像データベースも公開されています。アメリカのこの二つの漢籍収蔵機関には、それぞれ漢籍専門の有能な研究図書館員が居ますが、北京図書館との極めて密接な協力の下に、この二つのデータベースを作成しています。プリンストンの目録データベースは、東文研の目録データベース同様に書影が添えられていますし、ハーバードの全文画像データベースは鮮明なカラー画像で全内容を見ることができ、非常に便利です。



北京図書館ウェブページ上のプリンストン大学図書館漢籍目録データベース
<http://res4.nlc.gov.cn/home/index.trsr?channelid=630>



北京図書館ウェブページ上のハーバード燕京図書館の善本全文画像データベース
<http://res4.nlc.gov.cn/home/index.trsr?channelid=724>

2010年に北京図書館で、ハーバード燕京図書館善本全文画像データベース公開記念式典が行われましたが、その席上、社会科学院研究員楊成凱先生が来賓として挨拶され、東呉徐氏本『儀礼』を例に、東文研のデータベースが善本を全冊画像で提供していることが、版本研究にとって如何に重要であるかを説明されました。楊先生は、東大の関係者が列席していることは全くご存知なかったもので、このお話は、日頃各種の資料をご利用になる中で、実感として東文研データベースの価値を高く評価しておられたということですから、データベース構築に関わった私としては、驚きつつも非常にうれしいことであります。

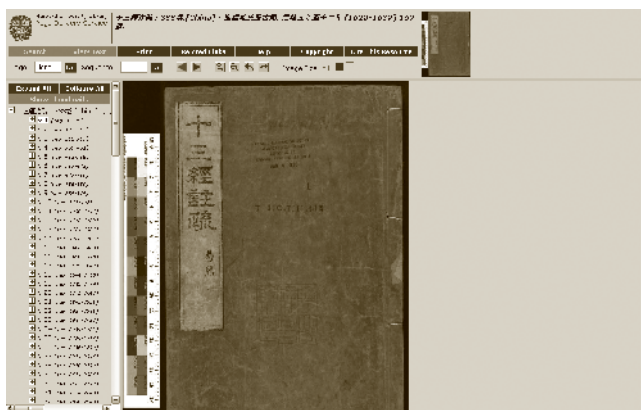
ついでながら、北京図書館では、流用・盗用を恐れて、そのウェブ上で公開する画像にはスカシを入れています。ハーバード図書館のOPACでは同様の画像がスカシ無しで公開されています。ハーバード図書館は、現在でも中国・日本の出版物を精力的に収集しており、そのOPACには非常に早く新出版物の情報が登録されています。現在、東京大学を含めた日本の大学で購入できる中国の出版物は数量が非常に限られていますから、その面でもハーバードのOPACは大変参考になります。

日本においても、東文研のようにまとまった形ではないにしても、各蔵書機関が全文画像の提供に努力を続けており、その量は最近数年で格段に増加しています。京都大学人文科学研究所では、早くから所蔵漢籍善本の一部を全文カラーで提供していますし、京都大学図書館も清家文庫を含む大量の貴重書を全文カラーで提供しています。同様の例は数多く、東京大学総合図書館・早稲田大学図書館など、いずれも特徴ある貴重な資料を全文カラーで提供しています。個人的な経験ですが、二十数年前、早稲田大学図書館に蔵される国宝『礼記子本疏義』なる資料に興味を持ち、早稲田大学まで出向いて白黒コロタイプの複製を見せてもらったことが有ります。現在では、これもネット上に全文画像が提供されており、中国からでも、いとも簡単に見ることが出来ます。しかもカラーですから、昔の複製では墨の点であるのか虫食いの穴であるのか分かり難かった箇所も、簡単に判別することが出来ます。国宝と言えば、もう一つ、国立博物館が運営しているE国宝なるウェブサービスが貴重で、東京・京都博物館が所蔵する国宝・重要文化財の漢籍資料が、これも全文カラーで提供されています。

このような形で、さまざまな善本・貴重資料の電子資料が利用できるようになり、最近では、版本研究の領域で革命的進歩が始まりつつあります。版本研究の要は、何といたっても比較ということに尽きます。しかし、善本・貴重資料の場合、直接二部を並べて比較する機会に恵まれることは極めて稀です。かつての版本学者は、限られた書影参考書を利用し、更に一部一部について詳細な記録を取ることによって、版本の違いを研究しました。その後、マイクロフィルムなども活用して研究が進んできました。しかし、電子画像が手に入るようになった現在、自宅の卓上で、二つ以上



ハーバード図書館 OPAC
<http://lib.harvard.edu/>



ハーバード図書館の全冊画像サービス

の善本の全文画像を一葉一葉じっくり比較することも可能になってきました。上に紹介した楊成凱先生が挙げられた東呉徐氏本『儀礼』の例も、東文研の善本画像全文データベースに東呉徐氏本が二種有り、それを『四部叢刊』影印本などと比較することによって、原版と覆刻本との差が明らかになる、というものです。

数年前に、東文研所蔵の宋刊元明通修本『儀礼経伝通解』を影印する準備を始め、その欠葉を台湾の中央図書館蔵本で補おうと考えましたが、中央図書館本の電子画像を東文研蔵本の電子画像と一葉一葉対照していく間に、原版・補版の認定が正確になり、原版の特徴を明確に認識することが出来るようになりました。このような作業によって、版本学の素人である我々が、部分的にですが、版本学のプロ中のプロである阿部隆一先生の判断を訂正・補足することも可能になっています。これは、一重に、電子版の存在によって、複数の善本の画像を直接比較することが可能になった結果です。このような例から、今後版本学が飛躍的發展を遂げる可能性は容易にご理解頂けると思います。

さて、以上紹介したのは、いわゆる善本・貴重資料の電子版ですが、善本以外の普通の漢籍の電子版こそが、今回特に皆様にお知らせし、同時に記録として書き留めておきたいことです。善本・貴重資料は、当然非常に価値の有るものですが、それだけに特殊な資料であって、特定の研究に際して重要な情報を提供する一方、日常的に使用するというものではありません。例えば『礼記子本疏義』は国宝ですが、中国古典学を勉強する全ての人を読んでおくべき資料、というわけではありません。東文研の善本全文画像データベースの資料も、その多くは特殊な価値の有る資料で、例えば大木文庫に所蔵される官箴類文献などは、百年前には大した価値が無いと見なされて蔵書家の興味を惹かず、その為現在となつては貴重な資料となっているものです。それらは、特殊で貴重なかけがえのない文献ですが、譬えて言えば山海の珍味であって、無ければ無いで済むようなものとも言えます。これに対して、日常的に利用する基本的文献は、米や麦のようなもので、特に珍しいものではありませんが、無くては話にならないという意味ではより重要なものです。

2011年は、日本においても電子書籍が大きな話題になったようですが、中国でも電子本閲覧器が使われるようになりました。そして、十年程度の時間をかけて蓄積されてきた漢籍電子版のデータが、一気にネット上に出現するようになりました。この現象は、我々の研究にとって極めて大きな意義を持ちます。大きなところで言うと、上海古籍出版社が九十年代に出版した『統修四庫全書』をスキャンしてPDFにしたデータが、数年前からネット上に現れており、広く利用されていますが、2011年には、『四庫存目叢書』・『四庫未収書叢刊』もPDFデータが簡単に手に入るようになりました。更に驚くべきは、台湾の新文豊出版社の『叢書集成新編』・『統編』・『三編』のPDFデータまで現れたことです。

『統修四庫全書』は、最近二三十年中国で刊行された各種大叢書の中で最も利用価値の高い重要なものですが、『四庫全書』を補足するという趣旨で編集されておりますので、『四庫全書』に収録されている本は基本的に除外されています。従って、『四庫全書』以後の清代中後期の最重要著作が大量に含まれる点で日常の読書に欠かせませんが、清代前期より以前の古典は基本的に入っていません。つまり、漢代や唐代の有名な古典などは、既に『四庫全書』に収録されている為に、『統修』には含まれないのです。これに対して『叢書集成新編』・『統編』・『三編』は、主に清代に刊行された百種以上の叢書に含まれた全ての文献を再編集したものですから、基本文献・重要文献は殆ど網羅されています。『四庫全書』は清代中期以降の著作を含まず、『統修』は『四庫』収録の基本古典を含まず、いずれもそれだけでは仕事になりませんが、『叢書集成新編』・『統編』・『三編』が有れば基本文献はたいてい揃っており、小さな図書館の一つ持っているようなものですから、『十三經注疏』や『二十四史』といった基本中の基本の常用文献だけ手元に有るならば、日常の読書に困ることは有りません。

これまで、私は、このような電子版資料を、手元の紙の本の不足を補うものとして利用してきました。例えば、『統修』は、私が所有しているのは自分の専攻に密接に関係する三十冊程度で、それ以外は学校の図書館に行かなければ見ることが出来ないもので、必要があれば電子版を利用していました。しかし、今後は、どうやら電子版でこそ資料が揃い、紙の本は、じっくり読んで、書き込みをしたりもする特殊な利用法の為に使うもの、ということになりそうです。住宅の面積が厳しく制限される現代社会において、経済的に余裕のない一般の研究者・学生が大量の書籍を所有することは不可能と言わざるを得ません。又、図書館も同様に、購入・配架できる書籍の量が限られ、規模の小さな所で『統修』や『叢書集成新編』などを揃えるのは無理ですから、基本資料について言えば、個人で持っている電子版の方が、図書館の本よりも揃っているということにならざるを得ません。

現在出回っている『統修』・『存目』・『未収書』・『叢書集成新編』・『統編』・『三編』などの電子版は、膨大な量のハードカバー洋装本を系統的にスキャンし、一冊ごとにPDFファイルにしたもので、精細度は高いとは言えませんが、文字の認識にはほぼ問題がない実用的な仕様になっています。これだけの大掛かりな事業は、とても個人の手には負えるものではなく、当然公的機関の仕事です。内容を見ると、全て北京大学図書館の蔵書印が押されたものばかりですから、どうやら、いずれも北京大学図書館が、数年前に電子図書館構想の一環としてスキャンしていたデータが、何らかの形で外部に提供されたものようです。

この手の書籍は、いずれも昔の版本を影印したもので、編集著作権は重視されておらず、しかも出版社からすれば、初めから図書館・研究機関に売って編纂したものであるため、出版後数年以上経ってから無料の電子版が流通していても、その利益を侵害するものとは考えられていないようです。しかし、現在では、新しい出版物が発売されて間も無く、個人がスキャンして作った電子版が

ネット上に現れるようになっており、出版社にとっては大きな圧力となっています。この状況に対応する一つの方向は、印刷部数を少なくし、定価を上げる、というものです。常識的価格の十倍ほどの定価を付けますが、資金に余裕のある図書館や研究機関が買ってくればそれで十分儲かる、という考えです。もう一つの方向は、印刷部数や定価を変えず、編集内容を良くすることによって、無料の電子版が手に入っても、やはり本で持っていたいと思わせ、個人読者の支持を得ようとするものです。現実的には、量が多い叢書のようなものは、今後個人では購入・所蔵せずに、電子版を利用し、利用頻度の高い重要な単行本は、編集が良ければ、印刷物を購入する、という形になりつつあります。

公的電子化事業として、更に大規模で非常に重要なのが、CADALです。これは、日本ではそれほど知られていないかも知れませんが、アメリカの資金援助を受けて起動したプロジェクトなので、初めはChina-America Digital Academic Libraryと言っていたものを、その後同じ頭文字のChina Academic Digital Associative Libraryという名称に変えたそうです。杭州大学図書館が幹事機関ですが、北京大学・清華大学など主要大学の図書館が参加し、共同で電子図書館を建設するプロジェクトで、まずは著作権の無い



CADAL
<http://www.cadal.cn/#>

ものから、ということで、線装本漢籍も特に民国期のものがかなり大量に提供されています。CADALのデータは、DJVU形式で提供されていて、『統修』などがPDF形式であるのと異なります。このような形式は変換可能ですが、清華大学図書館の蔵書印が有ってDJVU形式の電子版線装本漢籍がネット上に相当量現れており、それらはCADALのデータと同じものようです。

最近流通している電子版漢籍の出所として、もう一つ重要なのは、「基本古籍庫」というデータベースを売っている「愛如生」という会社です。この会社も、各種古籍の画像データをPDF形式にまとめており、それが何らかの形でネット上に現れています。

2010年以前、漢籍の電子情報を効率的に手に入れるには、「国学数典」という掲示板を利用する必要がありました。『統修』などは、E-muleというP2Pソフトを使ってダウンロードするのも有効な方法でした。2011年の段階でも、「国学数典」の重要性は変わっていませんが、「愛問」というサイトが出現して、誰もが手軽にダウンロードできるようになりました。非常に便利なものですので、必要に応じて、有効に利用して頂きたいと思います。



愛問
<http://ishare.iask.sina.com.cn/>

(北京大学歴史学系教授)

倉石武四郎博士講義ノートデータベースについて

戸川 芳郎

この度、東洋学研究情報センターの助力を得て、倉石武四郎先生の講義ノートをデジタル化し、公開 (<http://kuraishi.ioc.u-tokyo.ac.jp/>) する運びとなったので、その内容について解説する。

倉石武四郎博士は、明治三十(1897)年生れ、京都帝大、東京帝大教授を併任され、戦後は東大文学部教授を勤められた中国古典学、中国語学、中国文学者である。博士が昭和三年から二年間北京に留学駐在しており、個人的に収集した中国古典籍、清代學術関係図書は、博士の創設された日中学院を経て、博士の没後東大東文研の図書室に収められ、「倉石文庫」として知られる同図書室の最も貴重な漢籍コレクションの一つとなっている(同時期に東方文化学院京都研究所のために購入された陶湘旧蔵の漢籍は、現在の京大人文研の漢籍中の叢書の部の基幹を成している)。

今回公開することとなったのは、博士が亡くなられた時点で、この倉石文庫と共に日中学院に保管されていた、博士直筆の講義ノート類である。これらは博士が北京から帰国された直後、昭和六年から二十六年ごろまでの京都帝大、東京帝大、東大文学部での講義に際し執筆されたものである。

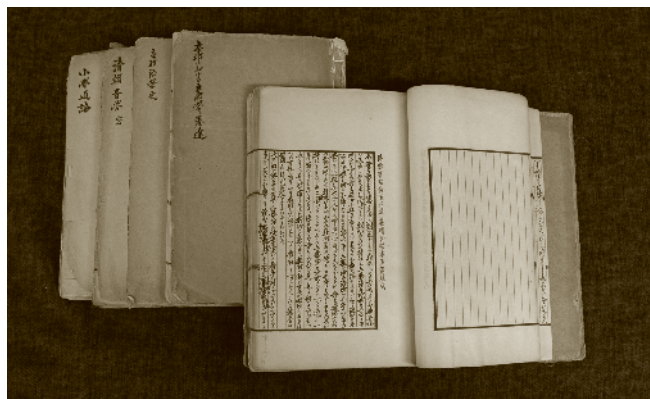
直筆墨書の上、毎回数葉ずつを教室に持参し、講義終了後に線装等で合訂された。講



倉石武四郎先生 昭和33年頃

義ノートという形をとりながら、その内容は何度も加筆を加えられた嚴重極まるものであり、教育史上の意義もさることながら、現在にも十分に活用しなければならない学術的成果を含んでいる。

戦後、中国語教育に没頭されたこともあって、戦前から戦後直後の時期の講義については『目録学』等ごく一部を除き著書としてはまとめられておらず、これら講義ノートの刊行が長らく期待されていた。博士ご自身も最晩年、京都帝大での初期の講義ノートを病床の枕頭に置かれ、大切にされていたと聞く。



倉石先生講義ノート、一部

筆者は博士が死去（1975）されて以来、また2001年からは当時東文研に勤務の橋本秀美助教授とともに、講義ノートの保管を受け持ち、指導学生などの協力も得ながら整理を続けてきた。その一部はCOE予算を得、研究者による校注を施した上で出版に至ることができたが、多くが未公開となっていた。昭和初期、博士の執筆は毛筆により行われ、筆跡保管状態はよいものの、わずかな例外を除き、基本的に酸性の強い箋紙が用いられているために劣化がはげしい。それらの保管には限界が近づいているため、すべてのページを撮影し、電子画像として複製保管する。またこれらは、画像データベースとして公開することとした。

<http://kuraishi.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

博士の講義内容は多岐にわたるが、以下のごとく大別して解説する。1) 清朝小学・音学（05001～8）、2) 中国語学（05009～11、13、14、17）、3) 中国古典学および日本漢文学概説（050015、18、19）、4) 中国文学・中国文化（05012、16、20～29）である。

まず、清朝小学と清朝音学、すなわち清代に発達した古代中国言語学を構成する文字学と音韻学は、博士の学位論文が「段懋堂の音学」（懋堂は段玉裁の号）であることからもうかがわれるように、博士の第一の学術的専門分野であると言える。

小学・音学は清代に発達した古代中国語研究であり、一般に清朝考証学（宋明理学に対し清朝漢学とも）と呼ばれる分野の一部にあたる。ただし中国では考証学という言葉を使うことは少なく、考拠の学という。これには主に歴史学を中心とした呉派と、言語学・文献学を中心とした皖派の二大潮流があり、博士が専門とされた小学・音学は後者である。

こうした学問が清代に発達したのは、周知のように異民族による支配を受けることとなった清代特有の事情がある。すなわち清代の学者たちは、明代までの学問、自らの見解に基づいて経書を解釈する「性理」の学を「空疎な」学として廃し、古典研究にその根拠を求め、論証による解釈に基づいて、中国元来の学問、特に後漢・魏晉の学を復元しようとした。清朝漢学と呼ばれるゆえんである。

つまり小学・音学は古代中国語の文字や音韻の研究を通じ、経書解釈が「空疎な」学となる以前に遡ろうとする方法論である。そうした根拠・論証を重視する態度は現代の観点からみても学術的であり、段玉裁の『説文解字注』、王念孫の『広雅疏証』をはじめ

め、極めてレベルの高い成果があった。倉石博士はこうした小学・音学研究に、西欧近代言語学の方法を加えて検討する新しい研究方法を開拓したのであった。

1900年ごろから様々な出土物、碑文、甲骨文が発掘され、また敦煌から六朝・隋唐代の資料が発見された。こうした背景から、当時の最先端の古典研究といえば文物考古の学であった。しかし倉石博士はあくまで「読むこと」を重視された。考古学的な手法について人に尋ねられた際には、「(そうした資料も) おいおい出てくるでしょう」と答えられたという。現場に行きもしないで、新出資料に飛びつくような研究は慎重さを欠くという考えであられたのだと思われる。筆者自身、先生に直接「先生は本を読むことだけです」と言ったことがある。先生は「ええ、読書が大事です」と答えられた。

小学・音学に関する講義ノートは、昭和六年の清朝許学（許は『説文解字』の著者許慎のことで、いわば説文研究）に始まり、昭和十五年ごろまで、計9点があり、主に清朝小学・音学の全体像の詳説に主眼が置かれている。

次に、中国語学に関して。博士の研究は清朝音学、すなわち古代中国語の音韻研究から発展し、昭和十年代後半には現代中国語の諸方言に至るまでの綿密な調査と研究に至っている。たとえば博士は昭和十八年から二十年にかけ、高田久彦氏と共に有栖川宮奨学資金を受け、「現代呉語の研究」を行っている。また戦後は東京大学理工学研究所の音響学の権威小幡重一博士とともに、当時最先端のオシログラフを用いて中国語諸方言の実験的研究を開始したという。おそらくは中国語声調の波形を観察したのであろうが、博士の一種理系的な独創性の表れである。一方では近畿一帯の古寺院に伝わる仏典誦読の方法から唐代中国語の古声調を復元探求した。また中国語学研究会（現中国語学会）を結成したのは昭和二十一年十月でのことである。

こうした研究と並行して、昭和十四年から二十年ごろにかけ、「支那語法」、「支那文学」に関する講義が行われ、中国語とそれを支える中国人の思考方法が探求されている。一高在学時代からことばのリズムに関心を持ち、訓読による中国古典文の読解方法に疑問を持ち続けたことが、旧態然とした東大に見切りをつけ、京大ゆきを決めたまっかけにもなっている。

中国語の音を大切に作る姿勢は、後年中国語教育に力を注ぐようになるまで一貫している。それを端的に表す例として、博士が編纂した『中国語辞典』（岩波書店）を紹介しよう。

この辞書の特徴は、漢字の親字による分類を全く廃してしまっただけでピンイン（拼音）で配列していることである。漢字ないし中国語を知るものにとっては、漢字による分類は便利なものであるが、音から漢字を類推できぬ初学者にとっては困難を生じる。この辞書は漢字以前に中国語を音から学ぶための辞書なのである。これは当時画期的な方式であったし、漢字を基礎に展開されてきた中国伝統の学問から見ても独創的な発想である。

さらに特徴的なのはこの辞書が、「意味による索引」を備えていることである。たとえば動詞であれば「目に関する動作」、「耳に関する動作」などという分類で、単語が羅列されているのである。しかも単語はピンインで表記されているため、私のような漢字で考える人間には使いようのない索引なのである。これは『爾雅』の構成から着想を得られたものと考えている。今のところこの索引を使いこなす人には出会っていないが、博士が、中国語を音、意味、文字の三方向から、極めて特徴ある視野でとらえ、特に音を重視されていたことが歴然とするのである。

次に、中国古典学および日本漢文学概説について。それぞれ昭和十八年度「支那学の発達」と昭和二十一年度「本邦における支那学の発達」と題され、ともに東京、京都の両大学を兼任していた時代の東京での講義である。後者については筆者らが二松学舎大学のCOE予算の一部を用いて校註を加え、汲古書院より出版し、前者についても現在出版準備中である。それぞれ中国における古典学、日本における漢文学の全体像を解説しようとしたもので、博士が研究

者人生の前半を捧げた「支那学」の集大成ともいえるかと思う。きたるべき東大専任期を控え、旧来の訓読法に偏った「漢学」を廃し、東大の中国古典・中国文学研究を刷新すべく俯瞰的視野で著わした講義である。また、昭和二十三年度の京大での最終講義「目錄学」は、自らの校訂により汲古書院から出版され、前半期の数少ない著作の一つとなっている。

最後に、中国文学・中国文化について。これらは、主に東大専任となった昭和二十四年以降に行われた講義であって、一転して対象は現代の中国文学・文化に変わっている。この時期以降、博士は古典学の講義を一切行わず、中国文学の講義と、自ら経営の日中学院での中国語教育に没頭されてゆく。現在博士の著作として知られているものの大半は、この時期以降のものであり、博士の古典学に関する業績が同輩の吉川幸次郎氏などに比べて知られていないのも、そのためである。

筆者は昭和三十年卒業で、ちょうどこの時期の博士の中国文学の講義を受講したが、大量の資料を配布され、極めて力を入れた講義であった。しかしながら、宇野哲人先生なども「あの人が中国語などやらずに経学をやっておればよかったのに」と言っておられように、なぜ博士が古典研究を封じられたのかは当時の学生たちにも謎であった。

その頃の学生で連れ立って、博士に『儀禮疏』の講読をお願いした経緯については、当センターの「センター通信」(No. 18, 1979年)の記事として書いたのでご一読いただければと思うが、それもこの謎を解かなくてよかった。

記事では、原因は当時の学生の力不足であろうと書いたが、正直なところそれだけとも思わない。当時は新制東大への移行期であり、また戦前の大学運営からの反動期にあった。中華人民共和国の成立直後ということもあり博士が担当された中国文学研究室などは、左翼的雰囲気のある学生にあふれていた。そうした中国学術の当時の雰囲気とは、次のようなものであった。

中国伝統の学術は「読書人」すなわち士大夫たち支配者階級によって形作られたものである、一方で新生中国の誕生により「老百姓」すなわち天下に満ちる中国人民の時代になった、そうして解放された本来の中国を支えてきたのは魯迅を代表とするような「人民」の文学であり、それこそが新しい中国学術の姿である、といった考えであって、明らかに中国古典学に対しては冷たい目が向けられていた。特に京都学派による「支那学」については、「古い中国にべったり」の学術として反感を持たれていた。

とはいえ、東京の中国学を刷新しようと志していたはずの博士が、そうした一時の学生たちの雰囲気流されたとも思えない。やはりご自身の「支那学」に対しての考えに、何らかの重大な変化があったものと思う。その後は「中国との懸け橋」を自認しながら、中国語教育に研究者人生の後半を捧げられた。そういう訳でこの時期の中国文学や中国文化に関する講義が、博士の学術の中でどう位置付けられるべきか、私にはわからない。当時の学生に合わせた講義であったという側面はあるだろうが、片手間のお仕事でなかったことは確かである。

今となっては、博士を直接知る者は少なくなり、最後の時期の弟子にあたる筆者としては、講義ノートの整理を通し博士の業績を伝える必要を感じていた。特に博士の専門であった中国古典学については、著作が少ないだけに、本講義ノートの公開には意義があることと思う。近頃は、二松学舎大学の町泉寿郎さん、京都大学の高田時雄教授などが、倉石博士の業績の整理を手がけられている。終生その院長であられた日中学院での晩年、先生は『説文解字注』を講読された。終始聴講した高橋均さん(東京外大)がそのノートを探っており、いま、その講義の全ビデオが日中学院に保管されている(猪飼國夫氏談)。時が経ったことで、倉石博士自身を調べようという研究者も現れ始めている。筆者自身で全講義ノートを整理することは叶わなかったが、講義ノートが広く公開されることで、倉石博士の業績、そしていづれは人間倉石武四郎像もより明らかになることと期待している。

(東京大学名誉教授)

センター便り

・平成23年度全国文献・情報センター

人文社会科学学術情報セミナーの開催

平成23年度全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーは、一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターが当番機関として、平成24年1月27日(金)に一橋大学経済研究所に於いて開催され、本センターも参加した。各センターの事業報告に続いて、今後の各センターの連携のあり方について活発な議論が行われた。

東洋学研究情報センター運営委員会委員
(2011年度)

所外委員

小松 久男	大学院人文社会系研究科・文学部教授
村田雄二郎	大学院総合文化研究科・教養学部教授
加藤 博	一橋大学大学院経済学研究科教授
小長谷有紀	人間文化研究機構・国立民族学博物館民族社会研究部教授
水野 直樹	京都大学人文科学研究所人文学研究部教授
宮治 昭	龍谷大学文学部教授
宮嶋 博史	成均館大学東アジア学術院(韓国ソウル)教授
柳澤 悠	東京大学名誉教授

所内委員

園田 茂人	教授	センターアジア社会・情報
池本 幸生	教授	汎アジア研究部門
名和 克郎	准教授	汎アジア研究部門(兼)センター比較文献資料学

(オブザーバー)

丘山 新	教授	(兼)東アジア研究部門(第二)センター比較文献資料学
榎屋 友子	教授	西アジア研究部門(兼)センター造形資料学
松田 康博	教授	汎アジア研究部門(兼)センターアジア社会・情報
板倉 聖哲	准教授	東アジア研究部門(第二)(兼)センター造形資料学
廣田 輝直	准教授	センター比較文献資料学

センター長

羽田 正	教授	西アジア研究部門
------	----	----------

センタースタッフ

羽田 正	(はねだ まさし)	センター長	西アジア研究部門教授	比較歴史学
園田 茂人	(そのだ しげと)	副センター長	センターアジア社会・情報分野教授	比較社会学
丘山 新	(おかやま はじめ)	センター比較文献資料学分野教授	仏教思想	
榎屋 友子	(ますや ともこ)	センター造形資料学分野教授	イスラーム美術史	
松田 康博	(まつだ やすひろ)	センターアジア社会・情報分野教授	アジア政治外交史	
板倉 聖哲	(いたくら まさあき)	センター造形資料学分野准教授	東アジア絵画史	
名和 克郎	(なわ かつお)	センター比較文献資料学分野准教授	文化人類学	
廣田 輝直	(ひろた てるなお)	センター比較文献資料学分野准教授	東洋文化研究情報 DB	

明日の東洋学
東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第27号

発行日 2012年3月31日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839(直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp

デザイン コズギ・ヤエ/印刷 富士リプロ横